

Urban Design Lab. Magazine

2015.12.31 vol. 236



まちに残したものは

WHAT'S GOING ON IN THAT TOWN NOW?

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

足助PJとは p.3
足助取材旅行記 p.4
行政担当者インタビュー p.6
足助視察から見てきたもの p.11

今月の担当：黒本剛史 中井雄太
編集長：今川高嶺
編集委員：中島健太郎 高橋舜
中井雄太 黒本剛史 砂塚大河
富田晃史 王誠凱 濱田愛



まちなに残したものとは
プロジェクトの「終え方」を考える旅

都市デザイン研究室の大きな特色の一つに、プロジェクトがある。プロジェクトに所属し、まちにどっぷりと入り込んで、都市デザインの実践を日々積み重ねている。

だが、プロジェクトには宿命がある。現場から離れた大学という性格上、恒久的にまちに関わることは困難で、いつかは終わりが来る。その時、報告書が棚に収められるだけで終わってしまうのか、それともプロジェクトの関与をきっかけに現場が活動を引き継いで継続していくのか。まちが本当に良くなっていくためには、プロジェクトの「終え方」を避けては通れない。

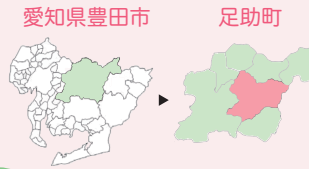
では一体、どうやってプロジェクトを終わらせるべきか。プロジェクトが作り上げたものは、どのようにまちなに残っているのだろうか。

どうしても気になった我々の足は、足助に向かっていた。

足助 PJ とは

What is the ASUKE Project?

足助とは？



町並み

重伝建の町並み
伝統的な建物が立ち並び、妻入りと平入りが混在する個性的な町並みです。自主的に町並みに合わせた後の時代の建物も多いです。

先進的なまちづくり

1975年に町並み保全団体が発足するなど、全国に先駆けて町並み保存が行われ、住民の意識も高く、イベントも盛んです。

豊かな自然

香嵐渓は全国的な紅葉の名所です。迫る山に挟まれた谷地に細長く市街地が伸び、足助川沿いには心地よい遊歩道が広がります。

繁栄とまちづくりの歴史

- 江戸時代 塩の道（中馬街道）の宿場町として栄える
- 1911年 JR中央本線の開通により物資輸送機能が低下、在郷町へ
- 大正～昭和頃 数千本のカエデを植樹し香嵐渓と命名、紅葉の名所に
- 昭和頃 人口減少、商店街の衰退
- 1975年 「足助の町並みを守る会」発足
- 1978年 第一回町並みゼミ開催（西村先生も参加）
- 1980年 町観光係・小澤氏の尽力で郷土館「三州足助屋敷」開館
- 1982年 取壊し予定の足助農協を「足助中馬館」として保存開放
- 以後、住民が自主的に、町並みに調和する建物へ改修
- 「足助の川を守る会」発足
- 1986年 町並みを守る会解散、「足助まちづくりの会」へ統合
- 1997年 中馬のおひなさん 2002年たんころりん 開催
- 1999年 第三セクターの（株）三州足助公社設立
- 2004年 足助町が豊田市と合併
- 2005年 豊田市による都市再生整備事業（電線地中化など）
- 2009-2014年 重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定

足助 PJ のあゆみ

当初は豊田市からの委託事業で、まちづくり交付金の用途検討、まちづくり構想の作成が目的でしたが、その他にも独自の精緻な調査やワークショップ等に基づき、提案や社会実験に積極的に取り組んでいました。特に、2010年度に行われた「あすけうちめぐり」は、現在でも観光協会によって引き継がれています。



コンセプト	構想・提案	調査研究	イベント
2008 「まちなか」「自然」「観光」から足助を知る	○まちづくり方針 1. 都市構造を明確に 2. 町と川を近づける 3. 足助らしい本物の景観 4. 町並み観光を確立 ○紙屋邸の空間整備提案 1. 足助の営みの中心 2. 観光や住民活動の中心 3. 町と川をつなぐ媒体	○まちなか調査 ○自然調査 ○商店アンケート調査 ○川空間アンケート調査 ○周辺集落調査 ○足助祭、中馬のおひなさん調査	○香嵐渓で社会実験 香嵐渓を訪れた人をまちなかへ →パンフレット配布、観光案内所設置、アンケート調査
2009 「生活の場としての塩の道」住環境としての魅力を増す	○紙屋邸の活用提案 「住民の生活」と「観光」の観点で2案を提案 1. 教室とシアター 2. アート展示空間 ○報告書「塩の道を日常の中心線とする」 1. 塩の道空間の考え方 2. 塩の道沿いの変遷 3-5. 空き家、空地、川空間の活用 6. 紙屋邸の活用提案 ○まちづくり報告展	○断面構成調査（街灯、ベンチプロット） ○空き家調査 ○塩の道の変遷 建物建て替え調査 ○駐車場調査 ○子どもの遊び場調査	○中馬のおひなさんにサイン提案（宝箱サイン、いすクロス） ベンチと情報発信機能の組合せ
2010 「生活と観光の融和」観光戦略と社会実験	○空家再生・空地マネジメント提案 ○観光の方針提示 1. 質の高いまちなみ観光 2. 生活に資するまちなみ観光 ○報告書「足助うちめぐり 観光戦略と社会実験」 0. 観光と生活の融和 1. 観光のあゆみと現在 2. 資源としてのうちがわ 3. うちめぐり 4. 社会実験の効果検証 5. マネジメントへ	○路地調査 ○川空間調査 	○田口邸サロン 活動の広報 ○あすけうちめぐり 家の内側にある魅力を観光資源化 観光客と住民の交流を町の魅力に足助中学校の生徒と共働
2011 「生活と観光の融合」	○足助まちづくりプラン 1. まちづくり戦略「生活と観光の融合」 2. 戦略実現の方針「9つのカギ」 3. 「足助まちづくりアクション」 ○2011年度報告書「足助まちなか交流ビジョン」 1. 交流からみた足助の変遷 2. 交流戦略うちめぐり 3. 生業からみる足助地域圏 4. まちなか交流ビジョン	○まちづくりプランワークショップ ○地産地消調査 商店へのアンケートで地産地消の実態と圏域を把握 	○あすけうちめぐりのサポート 観光協会主催のもと当日サポート



足助取材旅行記 —重伝建の町並みを味わう—

The Trip to ASUKE - Fascinated by Town View of Historical District-

東大のプロジェクトが活動した後、足助はいかに変わったのでしょうか。
現在の足助の様子を知るために、12月6日～7日にかけて、M1の5人と当時のプロジェクトメンバーであるD1矢吹さんが足助に向かいました。M1の5人にとっては初めての足助で、例年より2週間遅く見頃を迎えた香嵐溪の紅葉や、伝統的な建造物が立ち並ぶ町並みを楽しみました。また関わりのあった住民の方々に、その後の足助について生の声を伺うことができました。（編集：M1黒本）



16.宗恩寺
町を一望できる寺院です。斜面を畑に使い、針葉樹を植林した歴史を語ってくださいました。



15.マンリン書店
ギャラリー・カフェのついた、洒落た本屋です。自力で伝統的な建物を守ってきた努力を語ってくださいました。



14.田口邸
観光協会会長の田口氏の商家です。自転車イベントが行われており、蔵の裏には100年前の茶葉が入っていました。



13.山城屋旅館
明治20年建造の旅館で、PJの定宿でした。今回も利用し、女将さんが大変歓迎してくださいました。PJが当時作成



し忘れてきたパネルが玄関に展示してありました。

コラム

写真で比較する 足助の町並み

2011年、足助は重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定され、伝統的建造物の修理・修景への補助が始まりました。また、まちづくり交付金（現・都市再生整備計画事業）により、電線地中化や舗装の修景が行われ、PJ当時とは風景が一変しました。そこで、古写真、PJ当時の写真、2015年取材時の写真を3時点で比較してみました。

A 日月もなか前



B マンリン書店前



1.焼肉屋くらまえ
初日の夕食をいただいた焼肉屋です。隣のテーブルには知り合いの住民の方がいらっしやいました。



2.巴橋
香嵐溪といえばこの橋からの眺めが有名です。皆が不安そうに見守る中、欄干にカメラを置いて撮影しました。



3.足助八幡宮
足を助ける神様として旅人や足腰の弱い人が訪れます。奥にある本殿は、1466年再建の重要文化財です。



4.香嵐溪・香積寺
1634年に香積寺の和尚が境内に、大正12年に住民の手で山じゅうにカエデを植え、紅葉の名所になりました。



5.三州足助屋敷
まちづくりのカリスマ小澤氏の尽力で1979年に完成、山里の暮らしや職人技を身生の人で展示する施設です。



6.うなぎ川安
足助PJ時代にも愛用された、大人気のうなぎ料理店です。1時間近く並び、そのぶん絶品でした。



7.塩の道づれ屋
2005年に町家を修復した施設で、お世話になった雑貨屋「足助まいと商店」の店主にPJ後の足助を伺いました。



8.足助のかじやさん
5.足助屋敷で会った鍛冶屋さんの本拠地で、1階は刃物屋、2階は19年前からレストラン兼ライブハウスを営業。



9.川沿いの遊歩道
1986年に「足助の川を守る会」が発足し、汚かった足助川沿いを掃除し、住宅の裏口や遊歩道を整備しました。



▲現場に展示されている梁主屋、座敷など、大部分の建物は躯体を残して壁などを再建する「半解体」という手法で修理されています。



▲広大な敷地には数々の蔵が並び、鈴木家の繁栄ぶりを伝えます。川に近く広い敷地を生かすべく、足助PJが改修・活用の提案を行いました。



▲瓦を下ろしての作業
主屋の瓦を全て下ろし、傷んでいるものを取り替えます。瓦の下の土が見えています。





行政担当者インタビュー ―あれから足助はどう変わったか―

Interview of Hiroyuki AMANO from Administrative Officer at The Time.
Is There Any Change on ASUKE From Then ?

足助での2日間の町歩きでは、足助PJが町にもたらした変化を直接見ることはできませんでした。そこでPJが足助に残した影響や、PJ活動後の足助の歩みを知るために、当時の行政担当者であり現在も足助で活動する、天野博之さんのもとを尋ねました。そして、現在勤務する豊田市役所猿投支所にてお時間を頂き、元PJメンバーのD1矢吹、他M1三名でお話を伺いました。

(※記事中の一部写真は天野さんよりご提供いただきました。)
(編集：M1中井)

愛知県豊田市出身

現・豊田市役所猿投支所

地域振興担当副主幹

(元・足助支所地域振興担当係長

→足助PJ活動期の担当者)

地域人文化学研究所代表理事

とよた五平餅学会学芸員

あまの ひろゆき
天野 博之 さん

interviewee profile



PJ活動後の足助の動き

―東大が残した影響について考えるために、まずPJの活動が終了した後の足助の動きについて、伺いたいと思います。天野さんはいつから現在の猿投支所に移り、どのような仕事をしているのでしょうか

猿投に移って三年目になる。異動したのは東大とのプロジェクトが終わって、翌年くらいかな。おそらく、まちづくり交付金事業などの目処がついたので、調整の役割が一段落ついたということだと思います。

足助支所のころは地域振興課の観光担当で、町並みの重伝建の調整も担っていた。猿投では同じ地域振興担当だが、旧豊田市内の支所には観光の役割がないので、今は観光関連の仕事は担当していない。自治区という自治組織がまち単位であって、各区長からの要望を受けて地域課題の解決をしている。とくに豊田市には地域自治システムという特徴的なシステムがあって、中学校区単位にある地域会議で、地域の課題を解決していく。そのように、市と住民の共働で課題解決するシステムの運用をやっている。

―どのような課題がありますか？

猿投支所の管轄に五つの地域自治区があって、保見という地区を担当している。

ここは全国的にみても、ブラジル人が集住している。保見団地だけなら、日本人よりもブラジル人の方が多くいる。一方、新興住宅地に隣接して旧来の集落もあり、新旧どうし、また集落の中でも住民同士のコミュニケーションが薄くなっている。あとは、人口の多少にかかわらず地域の担い手を確保する必要があるし、豊田市で急速に進む少子高齢化の問題もある。そういったところが地域の課題として住民から出て来れば、どうするかを相談して考えている。

あとは道路修理などの要望が出てくるので、整理しながら担当部署をつなぐ窓口にもなっている。足助では係長だったが今は副主幹という管理職になってしまった。とはいえ、支所では一担当の役割もあるので、本庁の管理職とは違って、現場で動いていくという感じはする。

―足助で地域人文化学研究所をやられていますが、これは何ですか？

一言で言うと、まちづくり団体。地域、人、生活から生まれる文化。その「ヒト、モノ、コト」に化学反応をおこす触媒として、面白いという新しい価値観を作るタクラミをしている。

足助支所にいたころから色々な人とのつながりがあって、様々な方面で活動していると、一人より団体の方が各種の活動がし

やすいと考えて、団体を立ち上げた。ひとつはまず、寿々家再生プロジェクト(写真①)。寿々家という、空き家になっている料亭の再生をしている。あと、足助よりもっと長野県側の稲武地区(旧稲武町、2005年豊田市に編入)にある8戸しかない自治区のまちづくりの相談を受けて、支援している。あとは宇都宮三郎という日本で最初の化学技術者の顕彰活動。そして、とよた世間遺産。世界遺産じゃなくて。面白いものを「とよた世間遺産」に認定して、今度は「世界」に発信する活動を始めようと思っている。ざっといえばこんな感じ。

研究所を立ち上げたのは、足助支所から異動した年。なぜなら、足助にいて寿々家の活動をする利関係者になってしまうから、抑えていた。猿投に異動して利害関係がなくなり、足助から離れても一緒に伝建を進めてきた足助の人や町に対する義理と人情も立てなければと思っていたので、団体を立ち上げた。

足助のころから構想は考えていた。東大OBの永野くんたちが寿々家横の地藏小路の景観整備をやりたいと言っていて、その時に寿々家の建物の所有者とのつながりができた。そうしたご縁が重なって、自分が活動するために寿々家を借りることになった。むちゃくちゃ足助らしい建物だし、丁度良かった。

―2015年の報告書「豊田市足助地区における内発的観光の可能性」でも、天野さんは大学の方とコラボしていますが、それは研究所の活動の一環なのでしょう？

あれは愛知大学だね(写真②)。たまたま足助で行われた豊田市の「山里暮らし」イベントで町並みを案内していたら、その案内を聞いていた大学の先生に捕まって、メンバーに引っ張られた。愛知大学にはもともと近代化遺産のつながりでお世話になったご縁もあった。あと、寿々家の改修のときに愛知大学の学生を呼んで、重労働させたら2度と来なくなっちゃった(笑)。あとは足助中学校の総合学習で町並みことをやるということで、出向いて講師をしたり、夏休みに手伝ってもらったりした。寿々家のHPを見るとわかるけど、最初はぼろぼろで入れなくて汚かったのを、なんとかしてきた。足助中の生徒は地藏小路の植栽の手伝いもしてくれだし、去年も花を植えたり掃除したりして頑張っている。

―中学生との活動も天野さんから提案されたのですか？

そう。それはたまたま、お互いの思感が合致した。いろいろな場所への挨拶ついでに、こういう面白い建物を使ってみませんか？というような営業もしている。それで去年中学校に使ってもらえた。今年は学校に行けていないが、昨日稲武の観光協会から、町並み案内の依頼があって打ち合わせしてきた。その前日には二つ打ち合わせがあって、一つは足助ゴエンナーレの打ち合わせ。もう一つは中馬のおひなさんの時に、障害者のお子さんの作品展会場にしたいという相談が来ていて、部屋をひとつ提供することにしている。

この例のように、寿々家を「舞台」としてどう活用するか考えていて、そのような方向性で使うように仕向けている。空き家

も再生しただけでは仕方ないので、いかに活用するかが肝になる。建物はやっぱり使わにゃいけない。寿々家に関しては、こういう活動をやっている。

―様々な使い方が実際になされているようですが、寿々家を今後どう使っていきたい方針ですか？

寿々家は、まちづくりの拠点としたい(写真③)。どんな拠点かというと、地域の人、我々みたいな半分外人人間、そして外部の人間が混じり合って新たな価値観が生まれるような場にしたい。このような事を実現するにはやっぱり場がある。そうした場所として寿々家は最適だ。なんでもありな建物で、様式はばらばらだがなんとなくまとまりがあり、変な建物というほどでもないし質がいいところもある。とても足助らしい。この場で、皆さんと共に新しい価値観・オモシロさを作りたい。ただし、その明確な形はまだなくて、動きながら形を作っていきたい。

―寿々家は重伝建の特定物件なのでしょう。その場合は修繕などの制限があると思いますが、寿々家はどのように修繕しているのでしょうか？

本館(大正13年)、地藏小路に面している新館(昭和32年)のうち、本館だけが特定物件。もう50年経っているから申請すれば新館も通りそうだが、もう少し直してからの方が申請しやすいと思っている。初めは躯体が腐ってぐずぐずになっていて、これを土台から直すとか一億かかる。でもそんな資金はないから、文化庁の方に「姑息な手段」と評価していただいたが、骨組みを補強してこれ以上崩れないように留めて使っている。この先どう変形していくかはわからない。少しずつ直してどんどん改善はしていくけど、どう転がって

いくか、むしろ完成形がないかもしれない。

―寿々家の修繕やイベントにかかる資金はどうしているのですか？

去年、文化庁の委託事業をこの研究所が受けた。「NPO等による文化財建造物の管理活用事業」というもので、たまたま申請をしたら採択していただいた。窪田先生も委員に入っていたらして、報告会で上京した際先生に会えるかと思ったら、ご都合が悪くて会えずに残念だったけど。その事業では、改修ではなく活用主体なので、建物を活用する催事の実施や、バイトを一人雇って開放してみても、その成果や課題はどうだったかを実証した。

足助ゴエンナーレ(寿々家を舞台にした、ご縁でつながるアートイベント)は、豊田市文化振興課の「でかすプロジェクト」というアート系のイベントに対する懸賞事業があり、その賞金で回している。一年目に応募したら大賞をいただき、二年度は活動の拡充に対して賞金をいただいた。来年度も賞金をもらいながら、将来的には自立できるように回そうと考えている。

そもそも団体を立ち上げた一つの意義は、色々な助成金などの資金を調達しやすくなること。寿々家の修繕に関しては、地域自治システムのひとつで豊田市のわくわく事業という、住民等が行う地域の課題解決のための活動に対する補助金を利用させてもらっている。それで補強をしている。足助の地域会議に事業を認めていただいたが、何故取れたかということ、町並みの中にも空き家一杯あり、高齢世帯で本格修理まではできないという家もある。そこで簡易修繕のカタログを作りたくて、その実験の場の意味を持たせて寿々家の修繕をやっている。寿々家が倒れてないからこうすればいいかな、というように建物を次世代につなげることができる。そして、補強しな

足助で過ごす中で生まれた、いろいろな方との繋がり
足助を離れてからこそ、この「ご縁」を活かして深く関われたことも



▲① 中通りと地藏小路に面した寿々家
※写真①、③は天野さん提供



▲② 愛知大学中部地方産業研究所「豊田市足助地区における内発的観光の可能性」



▲③ 寿々家再生プロジェクト

がら使う活動の実例・形を地域に見せると、また次の展開が生まれると考えた。その提案が地域協議会で認められたと思う。今年で三年目、毎年 80 万円ぐらい頂いて助かっている。(ただし、わくわく事業では3年をめどに自立を目指す制度であるため、来年度は寿ゝ家の修繕を同事業で申請することはせず、わくわく事業へは、別に地蔵小路の景観整備事業を申請する予定。)

一足助の町並み芸術さんぽ(まちじゅうの建物や路地に作品を展示するイベント,2011年)はその後どうなりましたか？

足助支所時代に仕掛けて観光協会に主催してもらったが、自分が異動した後、観光協会の判断でやめてしまった。やっぱり催事もマネジメントできる人間がいないと。ゴエンナーレはそのリベンジの意味もある。おかげさまで人気があって、初年度(2014年)は600人くらいが来た。あの寿ゝ家に一日100人も入った。名古屋からも、これまで足助に来たことがない人も来たりして。二年目(2015年)は1,000人を超えた。おかげで寿ゝ家の床が傷んで、修繕のお金がかかってしまった。

足助ゴエンナーレでは、展示作品とコラボして地元の和菓子屋さん(初年度は両口屋と加東屋)にオリジナルのお菓子を作ってもらい販売した(写真④)。こういうことやると、自分たちの儲けは無いが、地域経済を少しでも動かせるので、こういう活動が広がればいい。

その他にも建物を修繕しながら、ワークショップしたり、補強したりしている。ホームページに活動の概略を紹介している。中学生が花を植えたり、花火の鑑賞会をやったり。花火は浅敷きみたいなのところがあって、町並みの屋根越しに花火を見られる特等席。あとは月見大会もやっているいろんな人が交流した。大広間が30畳あって広いから、そうした会場としても使える。

変化するまちのなかで、かたちを変えながらも引き継がれたもの



▲④ 足助ゴエンナーレの準備の様子
※写真④、⑤は天野さん提供

一他に地元の方と連携はしていますか？
去年の足助ゴエンナーレ1回目はオリジナル和菓子づくり、2回目となる今年は、「玉田屋旅館」の丸根さんたちのグループに1コーナーを担当してもらって、飲食を提供したりした。地元の皆さんに参加してもらって、また地元との連携が一段と深まったかなと思っている。

実は寿ゝ家のほかに、寿ゝ家と地蔵小路でつながっている、地蔵堂の奥の庫裏も契約して管理を任されている。寿ゝ家に隣接しているので、別館として使わせてもらっている。つまり、寿ゝ家と地蔵堂庫裏とで地蔵小路の片側半分は自分が管理することになっているので、路地の景観をコントロールできるというか、うまく作れる。地蔵堂は修理の必要があったが、修理の時にお庫裏を壊す動きもあった。それは困るというので、観光協会の田口さんが強く動いてくれて、庫裏も助かった。皆さんに助けられている。独特の景観を維持するために、地蔵堂を直すなら庫裏も壊さず残そうということ。伝建のおかげでそういう道筋ができてきて、一つの効果かなと思う。

足助PJが残した影響

一足助PJが残した影響について知りたいです。まず、豊田市の都市整備課は何を期待して東大に声をかけたのでしょうか？

実は市役所の考え方はあまりわからないが、一般的には大学を招く意義としてはまず、研究室の権威を味方につけるというのが一つ。それから、行政だと住民が構えてしまって素直に会話ができない場合が多い。お互いの垣根をすると越えられる人ばかりだといいが、そうはいかない。学生はふらっと入れてニュートラルなので、地元の要求や隠れている困りごとを引き出せる可能性を期待されていると思う。あともう一個あった。柔軟な発想。役所は規制と

かを知っているから、できないだろう、と思っちゃう。これできるんじゃない？と自由な発想をするのがみなさんの得意なところ。そこが面白い。できるできないの判断はさせてもらうけど。紙屋邸を遊び場や映画館に使おうという発想もあったよね(前項写真⑥)。あれは、まあちょっと違うかなって思ったけど(笑)、それを出してくれるってのがいいかな。行政側にはないものを補ってくれる発想は期待できる。

一足助PJの「あすけうちめぐり」が現在も続いていると聞きました。観光協会は、どのように引き継いでいるのでしょうか？

東大の皆さんと地元の皆さんと一緒にやって、「うちめぐり」、なかなか反応良かったので、続けようと思って観光協会に引き続きお願いした。東大のPJの意図したことは、観光客と、受け入れる家主のプライベートのどこに境界線を引くか、という実験だったんですよ。それは報告書の通り一定の成果を出していて、もう一步深めてシステマチックにやれたらよかった。

プロジェクト後の引き継ぎとしては、個人的にはまちづくり推進協議会のまちづくり部会と観光協会が引き継いだらいいと思ったが、なかなか人手が足りず調整が難しかった。特に、人が来てくれる11月だと、人員が他に取られちゃってできない。なので、観光協会が中学生のボランティアを募って、開けてくれる各家に中学生を配置して、来てくれた人に案内してもらった。ガイドがつくことによって内と外の境界をコントロールするという形でやっていた。しかしそれはお金が動かないよね。お客さんから料金を取れずに観光協会が持ち出すのみだと、ただ労力がかかってしまう。

なので、今はツアーになってしまった(写真⑤)。足助交流館に何時に集合して、中学生ボランティアが町並みを案内して、お宅に上がって見るという形式。今年寿ゝ



▲⑥ 足助PJが行った紙屋邸活用提案

家では、中学生が連れてきて、案内は自分がやった。なので内容は変質してしまった。

一PJで作成した報告書やプランは、行政の方に引き継がれているのでしょうか？

みなさんが作ってくれた報告書がどう引き継がれているかという、足助支所の地域振興担当の職員がかなり変わっており、当時を知る担当は今いない。成果としての冊子は引き継がれているが、精神の引き継ぎはないかな。まちづくり交付金事業や重伝建の推進などガチャガチャした雰囲気や、調整の煩雑さを知っている人はいないので。特に、今年は香嵐溪のみじ祭り60周年記念事業で観光担当が忙しかったのもあって、足助の町並みをどうするか意識は、支所内で相対的に低くなったかなと思う。

これも結局人だと思う。担当に誰がいるか。住民であっても、支所の立場であっても、それぞれに難しいことがある。そのバランス感覚が大切だと思う。地元との距離感は絶妙な所にいたい。ゼロ地点に。行政の人間としては行政の限界も見えてきて、住民の皆さんと付き合っているとその限界も感じている。だからその隙間は、当研究所みたいない形や、やれる人が関わっていけばいいと思っている。

一行政の方はなぜ、まちに入り込み過ぎずに、「ゼロ地点」にいるべきなのでしょう？

お祭りやいろんなお付き合いがあって、町の中の上下関係も当然ながらある。地元の人間なら筋は通さなければいけないところも、外の人間なら上でも下でも関係なく、自由に動けるから、縛られないし、コトを動かすにはその気持さは大事。学生さんたちにPJ頼むのは、役所としてはそこが一番の面白みだと思っている。遠慮なくガンガン行っても、期間限定のPJだから、後

重伝建指定により守られ、訪れる人も増えた足助 この制度を「まちづくりの道具」としてどう活かしていくべきか



▲⑦ 電線地中化等により趣の生まれた町並み

腐れが残らない(笑)。行政としても、あいつらのやったことですから、と言える。

自分自身は自由に動けることで、あっちと接してこっちと接して、とできる。中には勿論、誤解があって気まづくなった方もいるが、住んでなければ気にならない。ゼロ地点に立つというのは便利がいい。でも、そのバランス感覚は個性だね。人によって感じ方が違うし、そこにうまくいることが、できる人もできない人もいる。特殊な能力だと感じている。

行政の人といえば、文化財課の分室の職員の一人が重伝建の枠の中で、文化財保護の面でまちづくりを頑張ってくれている。これも、伝建やってよかったと思う。たとえば石垣に下水通すのでも、伝建がないと石垣を壊すことになりかねないが、今は環境物件になっているので簡単にいじれない。その代わり工夫がいる。地元の話だと、業者が少なくて工事が高額になりやすく、地元への負担はあるけど、価値を守れているのでいいかなと思う。

伝建では、支所のもつ景観相談会の委員が、住民と伝建側の調整役になって頑張っている。しかし、委員の交代などによって、少しずつ検討されている内容の雰囲気が変わっていく傾向があるのを聞いて、それは残念だなと思う。修繕や建て替えを相談する景観相談会は、まちづくり推進協議会の伝建部会、まちづくり部会両方と建築士から構成されていて、景観条例で位置づけられているシステム。システムとしては良くできているから、あとは運用する人による。

伝建制度と足助

一プロジェクトの活動後、豊田市による都市再生整備事業が行われました。舗装や電線地中化等で足助がどう変わりましたか？

電線類の地中化で劇的に景観は変わっ

た(写真⑦)。景色が変わったというのは、歩けば如実に感じる。街道沿いに電柱がなくて道路がきれい。特に、空が明るくなったので、山並みが良く見えるようになった。山並みが見られるのは足助の特徴的なところで、地中化でその良さがより出ている。

統計はないが、この2-3年、紅葉の時期に香嵐溪から町並みに流れる人が多くなったような印象を受ける(写真⑧)。町が変わって来たというのも要因かも。年に5件ぐらいは伝建の修理・修景をやるので、選定から3年経って、キッチンとした建物が少しずつ増えてきている(写真⑨)。新しい建物でもしっかりしている。町並みが少しずつ変わってきていて、ざっと列で揃って来たらすごい事になると思う。

そうなると、足助の価値を残して、本質性を担保してやっていく事に伝建の意義は有ると思う。まちづくり交付金事業で、お金のかかる都市基盤整備はできた。あとは住民が伝建制度をうまく利用してやっていく、ということだと思う。伝建制度は正直、住民が苦に感じればすぐ苦になるもの。うまく使えば、唯一無二の足助ができて、生活が楽しくなる制度だ。

一住民の声としては、助かるという声と、大変だという声がありました。

先ほどの下水の話でも、見積もりをする、ちょっとした工事だけで30万とかいうことになっていて、それは負担をかけてしまっている。あとは、自分の建物をいじれないという先入観があると、手続きなどを面倒と感じてしまう。実際は手続きさえすれば内側は自由にできる。寿ゝ家も適当に色々やっているが、景観相談会で趣旨を説明し、理解を得ていけばいいので、そこまで大したことはない。伝建は足かせではなく、まちづくりの道具だと考えてほしい。



▲⑧ 平日にもまちなかを巡る自転車と観光客



▲⑨ 改修中の紙屋邸(平成34年度完了予定)



足助視察で見えてきたもの

A Conclusion from the ASUKE Tour

Yabuki Kenichi

矢吹 剣一 (D1)



修士卒業以来、三年半ぶりの足助訪問でした。

今回の訪問では、修士の皆と歩きながら、お世話になった方々にお会いする事ができ、プロジェクトのその後の状況や、足助の現状について何うことが出来ました。都市デザイン研究室が実施した「あすけうちめぐり」は観光協会が主体となり、少なからず変更はあるものの、継続して頂いていました。また、保存修理工事が進む重要文化財「旧紙屋鈴木邸」の利用方法も検討が始まるそうです（朝食に立ち寄った両口屋さんには市の文化財課に掛け合って頂き、なんと現場を見せて頂きました！）。観光協会会長になられた田口さんにもお宅を見せて頂くなど、大変お世話になりました。

プロジェクト（自分が関わった年度）では、地元のまちづくり部会（まちづくり推進協議会の部会）のサポートという形で、回遊性向上や拠点形成、空き家活用等の課題を検討しましたが、現在足助では特定物件の改修に伴うデザインの変更の必要性や、修復に係る資金負担等の

Kuremoto Takeshi

黒本 剛史 (M1)



今回の訪問は、ある意味ショッキングな結果となりました。PJ が当時関わった行政の方やまちづくり部会の人々は別の場所に移り、重伝建選定・修景事業の影響が圧倒的に大きく働いていました。足助PJが、まちの中心的な動きから取り残されていくように感じました。

しかし、足助PJが生き続けていると期待させる場面もありました。2010年の社会実験「あすけうちめぐり」が引き継がれていること、新たにまちづくり部会に加わった方が報告書を読んでくださったこと、関わっていた寿々家が天野さん方によって活用されていくこと、このように地元の尽力があって初めて活動が引き継がれていきます。うちめぐり以来家を開いてきた家主は、PJをきっかけに観光客へのまなざしを変化させたかもし

悩み等の重伝建地区選定以後直面している課題を（数人ですが）住民の方から伺いました。

やはり、まち（都市）はその都度直面する課題が異なり、まちづくりには終わりはないということを痛感するとともに、それらにしっかり向き合い続けること（続けられる体制づくり等）の重要性を感じました（足助でも今まさに、足助町並み景観相談会の皆さんが尽力されています）。

一方で、重伝建地区制度が創設されて40年が経ちますが、かつて「まちづくりの先進地」であった足助をリードし続けた小澤庄一さんが妻籠宿などから学んでいたように、全国各地の重伝建地区と、その地のまちづくり活動の中にある「知」を共有することで乗り越えていける部分も少なからずあるだろうとも感じます。今後も足助のまちづくりは続きますが、自分としてもしっかり足助を見続けていきたいです。



▲三年半振りの目に、足助はどう映ったのでしょうか

れません。こう見ていくと、まちづくり部会のサポートやまちづくり交付金の検討といった「本来の目的」から広がった、活動の「広がりの部分」に、PJの遺産が残っていると言えそうです。

折角身を粉にして取り組むPJが、いかに地域を良くし続けるかと考えるに、各PJで状況は違うのですが、PJの去った後も町を担う「同志」を発掘することが重要ではないでしょうか。地元に残りながら、理想に共感し、力を持って動かしていく人です。その初動のきっかけを生み、方向づけることが、最後まで関われない「よそ者」の役目かもしれません。

最後に、足助は美しく、活動が豊かで、お気に入りの町となりました。住民の皆様は、町を愛していました。町は今過渡期にありますが、将来も足助が愛される町であり続けることを願ってやみません。

今回のツアーでご協力いただいた足助の皆様、ありがとうございました。■

一かつて、足助はまちづくりの先進地としての地位があって、50年前重伝建を選ばず、自主規制の町並み整備を行ってきました。合併後に選ぶという判断をした豊田市としての考えはあるのでしょうか？

豊田市での政策的意図としては、当初伝建という選択はなかった。合併協議のときにも重伝建の言葉が出ていない。足助町時代から商業振興として中心地の活性化を図っていたようだ。足助は商売で町を成り立たせようとしていて、だから最初にましかん（まちづくり環境整備事業）による景観整備が行われた。次に見つけた補助金が、まちづくり交付金事業。合併協議の際には、交付金による足助の景観整備は都市整備課が担当になっていた。豊田市としては景観整備の政策は勿論あったが、あくまでも都市整備のための政策で、重伝建はなかった。重伝建に向けた準備の際に印象的な話があって、文化財課が伝建の話を報告した際に、「いつこんな話になったんだ？」という発言があったと聞いた。

文化財課が後に作った報告書では、組織的に動いたように読めるが、最初は積極的に動く人が少なかった。その当時自分は別の担当で何の権限もなかったが、豊田市と合併する足助に守るべき町並みがあるのに、都市整備的な手法で町並みの価値を失ってしまう恐れがある、文化財課職員として何かしないといかんだろ、と思った。はじめに足助の自治会長さんたちに提案して、強く反対する考えがないのを確認した後で、伝建を考えませんかと住民説明会で提案した。守るべき価値を守りたいという思いがはじめにあった。

一何もなかったところに天野さんが提示したということですか？

そう。後から出て行ったので、最初はかなり都市整備課に叱られたけど。提案したのが平成19年ぐらい。そこから重伝建になるまでは4年、早かった。幸いだった

のは、前回の時の重伝建アレルギーが無かった事。昭和50年代に伝建の話が持ち上がってなくなったので、おそろおそろ提案したら、意外に反対が少なかった。

一町並みが変貌する危機を伝建が救った？

町並みが映画のセットに変質してしまう所を、重伝建によって防いだと思っている。都市整備的な景観ルールでの「景観整備」は、画一的な民芸調の町を作りそうだった。例えば下水道が整備され、それに接続するために水回りを直す場合、基礎を打ちなおすくらいなら古い家を壊して新しく建てた方がいいかもしれない。そこで、景観ルールに従ったべたっとした家を新築して補助金が貰えるなら、自分だってそうしてしまう。それでも景観が整えばいいじゃないかと言うのが、景観整備の考え方。それより、今あるもののがなぜそうなるのか、本質的な価値を大事にして、それを守っていきましょうというのが伝建。それは本当に手間がかかることだが、足助が町並みを武器にして、これから長い目で見て生き残るには、伝建が必要ではないか、という強い思いがあった。伝建の補助は国がつぶれない限り担保される。いずれにしろ、まだ始まったばかりだから、形が見えてこないとまだまだ賛否両論ある。10年ぐらい経てば変わってくるだろう。その時まで寿々家を持っていられるかはわからないよね。

建物は少し綺麗にすると、生き返る部分と甘えちゃう部分がある。寿々家も土足で踏んだ畳を掃除して水拭きするとふわっと弾力が出てきて気持ちいい。だけど、歪んだ部分につっかい棒してもまた沈んでくる。いつかは改修しなきゃいけないけど、一億かかるから、それをどう工面するかが大きな課題。その負債を抱えながらまちづくりを進めなければならない。ただし、何とかなんと楽観的に考えている。そんなバカじゃないとやっとなん。

一伝建で難しいと感じるのが、自費で何千万をかけて頑張っていた方が損をする問題。あとは、小改修に伝建のシステムでは融通が利かないと話を聞きました。運用方法の改善も今後可能なのでしょうか？

運用の改善を考えていくというのは、その通り。過去に自費で修繕した人でも将来的に補助をもらうこともできるので、損をするということはない。また補助金を得るためには本格修繕しなきゃいけないと思っちゃうが、寿々家のようにちょこちょこ修繕でも建物を持たせることもできるので、何でもかんでも補助金を貰わなくてもいいし、少しの修繕をダメというわけではない。まだ事例が蓄積されていなくて、きちんとした説明がないので、単に伝建で苦労したとの噂がよく広まる。そういう噂が解消していくともっと良くなる。ここはこういうやり方でやりました、とか。住民の生活と伝建等のルールのバランスをとるのが景観相談会なので、景観相談会でちゃんと相談してくれば大丈夫なはず。寿々家で修繕カタログをつくる構想も、修繕のノウハウを地域で蓄積して、事例を作っていきたいという理由がある。

大半の人は、どうなんだろうという不安と期待で入り混じっている。だから、こういう筋道ですよ、としっかり説明すれば賛成が増えてくると思う。大勢が賛成になれば、反対派の人たちも気が変わってくると信じている。自分の活動も、言葉では伝わらない部分を、形で見せるのが大事だと思っている。口で言うと、できるのか？本当か？と言われるが、やってしまえばやれるということを示せる。行政の立場ではこういう事はできないだろうけどね。

*

経営的センス、実行力を持ちながら精力的にまちづくりを進める天野さんに圧倒され、足助の推進力を実感した取材となりました。ご協力ありがとうございました。■



▲ / ▲► 天野さんより、書籍だけでなくタブレット端末を使いつつ、足助の今について説明を頂きました



Information

12月のウェブ記事



12/30 さわらぼ活用アイデア会議
12月20日に佐原プロジェクトが開催した、さわらぼ活用のためのアイデア会議です。佐原の現状を知ること、佐原に必要なものを考えることを目標にした3部構成のワークショップとなりました。



12/30 超多町パーティ、開催！
12月19日、神田プロジェクトで「超多町パーティ」を開催しました。地域のつながりづくりのきっかけ作りのため、住民の方をお招きし、多町かるた作成ゲーム、ワークショップ、懇親会などを行いました。



12/31 図解 都市空間の構想力 出版記念イベント
12月20日、『図解 都市空間の構想力』の出版を記念し、本郷キャンパス周辺のまちあるき、著者の先生方によるトークイベント、懇親会が行われました。



12/31 12月、三国にて現地調査を行いました！
三国プロジェクトは、空き家の活用を軸にしたまちづくりビジョン提案のため、空き家の実態や流通の課題などを、ヒアリングや状態調査などによって調査しました。

是非ご覧下さい： <http://ud.tu-tokyo.ac.jp/ia/blog/>

1月の予定

1/7,8: 研究室会議
1/15: 神田PJ 区役所小藤田さん勉強会
1/18: 設計特論第一 最終回



編集後記

黒本 剛史

マガジンが月末発行なので、12月号の発行は大晦日となりました。例年は親の実家の石川に帰っているのですが、今年は東京で年越しになります。紅白と「ゆく年くる年」をぼんやりと眺め、年が明けたら仏壇と神棚にお参りして寝るという年越しを22回行ってきましたが、今年は神社でも見に行き、首都東京の新年の賑わいを見届けてみたいと思います。一年の計は元旦にありということで、2016年の抱負は、「頭を使って、少しでも改善」でいきたいと思います。皆様も、どうぞ良いお年をお迎えください。来年も都市デザイン研究室マガジンをよろしく願います。

